



# 名古屋大学大学院共通科目：開設から2025年度まで（〔特集〕 大学院共通教育の可能性と課題）

齋藤，芳子  
山里，敬也

---

(Citation)

大學教育研究, 34:57-66

(Issue Date)

2026-03-31

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/0100503420>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100503420>



## 名古屋大学大学院共通科目：開設から 2025 年度まで

### Retrospective of Nagoya University Graduate School Common Courses : the Foundation to 2025

齋藤 芳子（名古屋大学 教養教育院 特任准教授）/ SAITOH, Yoshiko

山里 敬也（名古屋大学 教養教育院 教授）/ YAMAZATO, Takaya

#### 要旨

名古屋大学大学院共通科目は、2012 年度に教養教育院に設置されたものである。開設に向けて 2011 年度から始まった議論の背景には、博士課程教育リーディング大学院事業を直接の契機とした、全学のための大学院教育の強化がある。当初は開講 6 科目から始まり、2025 年度には 81 科目を開講するまでに拡充した。また、本科目への全学的な理解も進み、各研究科において修了の単位として算入可能になりつつある。実際の開講科目には、体験型講義、大学教員準備講座、リサーチスキルズ、マルチリンガルスキルズ、プロフェッショナル・リテラシーなど、学際的・実践的なプログラムが含まれている。近年は、卓越大学院事業や次世代研究者挑戦的研究プログラム事業との連携が進み、受講者数も年々増加している。設置から十余年を経た現状を踏まえ、今後は、科目内容や運用体制の検証、各研究科や関連部局との連携強化を通じて、より効果的な仕組みづくりを進めることが期待される。

#### 1. はじめに

名古屋大学大学院共通科目は、本学教養教育院のもとで 2012 年度に開始され、2026 年 4 月には 15 年目を迎えようとしている。初年度の開講は 6 科目であったが、2025 年度の開講数は 81 科目に増え、また、各種大学院教育プログラムとの連携も進められている。本稿では、本学における大学院共通科目の設置経緯とその後の展開、特徴的な科目事例について概観したうえで、今後の課題を抽出する。

#### 2. 大学院共通科目の設置経緯

##### 2.1. 科目の設置まで

名古屋大学における大学院共通科目の開設は、すでに数年にわたり実施されていた教養教育院の整備・充実の一環として位置づけられる（栗本・栗本、2016）。この整備・充実は、「質の高い教養教育と専門教育を教授し、国際的に評価される教育成果の達成を目指す」（第 1 期中期目標）ために、第 1 期中期計画（2004～2009 年度：「教養教育院の整備充実を図る」）および第 2 期中期計画（2010～2015 年度：「教養教育院の機能を充実させる」）

において掲げられたものである。

大学院共通科目の設置にいたる前には、教養教育院に電子教材開発室が設置され、e-Learning 教材の開発や、その提供を通じた学習ニーズの把握および学習効果測定が行われていた。また、刷新された英語カリキュラムの実施を支援するアカデミック・イングリッシュ支援室（以下、AE 室）の設置に加え、“writing is thinking”をモットーに、学術論文執筆スキルと論理的思考の向上を並行して支援する MEI-Writing が開設された。AE 室や MEI-Writing は、それまで学部学生を対象としていた教養教育院の活動が、大学院学生に開かれる端緒となった点で特筆される。さらに、自主的・自律的な学習を促進するための環境設備も進められ、そのなかで設置されたアクティブラーニング用教室は、のちに大学院共通科目でも活用されることとなった。

大学院共通科目の開設にかかる全学的検討は、全学教育企画委員会（平成 23 年度第 4 回、2011 年 9 月 13 日）において「教養教育推進室の整備（強化）に関するWG」（以下、WG）を設置することが提案され、承認されたことに始まる。この背景には、「グローバル化社会の大学院教育」（中央教育審議会平成 23 年 1 月 31 日答申）などをふまえた大学院教育の開発・実施が急務であるとの認識があった。より具体には、文部科学省による「博士課程教育リーディング大学院事業」が開始され、本学も 2011 年度に 2 件（最終的には 6 件）の採択をうけ、大学院教育を全学的に充実・強化する必要性が高まっていたことが挙げられる。WG は、教養教育推進室を整備し、新たな大学院共通科目の開設を検討することなどを目的としており、WG 主査には木俣元一高等教育研究センター長・総長補佐が指名された。WG での検討内容は、同年 11 月 15 日の同委員会に提案され、各部局持ち帰りの上、意見聴取することとなった。同年 12 月 13 日の同委員会において、各部局からの意見とそれらへの対応が資料に基づいて説明され、意見交換の後、一部修正した提案が了承された。

第 67 回全学教育委員会（2011 年 12 月 20 日）には、「教養教育推進室の整備（強化）について」が議題に挙げられた。この議事において、前週開催の全学教育企画委員会です承を得た「教養教育院教養教育推進室の整備に関する提案」についての説明が、木俣氏からなされた。その内容は、教養教育推進室に新たに共通教育企画部門を追加して専任教員をおき、大学院共通科目の開設後の企画・立案を担当するというものであった。

本会における質疑では意見や要望が多数あり、継続審議となった。学部教育との差別化、専任教員を配置するほどの業務量の有無、始まったばかりの大学院共通外国語科目の成果検証の優先性などの疑義が示された。また、要望もいくつかあり、各研究科ですでに実施している科目をより多くの大学院生が受講できるように支援してほしい、複数の研究科で利用できる授業内容にしてほしい、などが挙げられた。これまで全学教育（いわゆる学部の一般教育）を担当してきた教養教育院が大学院教育にも手を広げることに対し、違和感のようなものがあつたのではないかと想像される。他方で、各研究科においても、大学院

教育改革が現在進行中の課題であった様子も窺える。

その後、第 69 回全学教育委員会（2012 年 2 月 21 日）にて、「名古屋大学大学院共通科目規程」ほかが審議了承され、大学院共通科目の枠組みが確定した。当該規程において、大学院共通科目は、「国際社会に通用する語学力を養成し、社会変化に対応し得る高度で知的な能力及び素養を備える人材の育成を図る科目」と定められた。なお、同規程の施行日は 2012 年 4 月 1 日であり、また関連する規程類についての改正が最小限で済むようなかたちが採られたことにより、リーディング大学院事業の受講生には在籍初年度から大学院共通科目を提供できることとなった。

## 2.2. 科目開設以降

名古屋大学大学院共通科目規程の別表には、当初、大学院共通科目の授業科目及び単位数について、計 8 科目（英語（アカデミックプレゼンテーション）I、同 II、Relationships and communication I、同 II、体験型講義「マネジメント」、同「リーダーシップ」、大学教員論、キャリアデザイン論）が記された。このうち初年度には、Relationships and communication I（春・1 単位）、Relationships and communication II（春・1 単位）、体験型講義「マネジメント」（夏期集中・2 単位）、大学教員論（夏期集中・2 単位）、キャリアデザイン論（秋・2 単位）、体験型講義「リーダーシップ」（冬期集中・2 単位）の 6 科目が開講された。

2012 年度春の大学院共通科目開設と時期をあわせて、教養教育推進室の目的や部門構成が改められた。当室については、名古屋大学教養教育院規程（2012 年当時）において「推進室は、社会変化に対応し得る高度で知的な能力及び素養のある人材を育成する国際的な通用性を備えた質の高い教育を行うとともに、教養教育における質の保証を目指すことにより、名古屋大学における教養教育の充実及び強化を図ることを目的とする」ものとされた。また、室内に新しく設置された共通教育企画部門にて、大学院共通教育プログラムの開発・実施支援と、共通教育（学部）の質保証システムの構築及び新たな共通教育プログラム等の開発を行うことが内規に定められた。当該部門には新たに教授ポスト 1（総長管理定員）がつけられ、同年 4 月からの選考プロセスを経て、7 月 1 日付にて着任となった。以降、当該教員が大学院共通科目の核となる科目「体験型講義」（後述）の開発を担うことになった。

第 77 回全学教育委員会（2012 年 11 月 20 日）においては、教養教育推進室共通教育企画部門に「大学院共通科目調査部会」が設置されたことが報告された。本部会は、その内規において、大学院共通教育プログラムの企画・立案、大学院共通科目の開発、大学院共通教育プログラムの質保証システムの整備等を行うための組織であり、構成員は教養教育推進室長、共通教育企画部門の部門長および副部門長、その他部会が必要と認めた者と定められた。第 80 回全学教育委員会（2013 年 2 月 19 日）では、2 名の兼任教員の委嘱が審議・了承された。

その後、2016年4月に行われた教養教育推進室の部門再編のなか、共通教育企画部門は廃止のうえ、大学院共通教育プログラムの企画・立案機能を基盤開発部門とアカデミック・ライティング部門が共同して実施することになった。また、2022年4月には教養教育院統括部に大学院共通科目部会が新設された。この部会は全学教育科目（いわゆる一般教育科目）の各部会と併置され、2022年度からの新カリキュラム導入に伴い、学部初年次から大学院までシームレスな教養教育を実施するための一環として新設されたものである。これに伴い、2022年度秋学期からは大学院共通科目についても学部と共通の様式での授業アンケートが実施されるようになり、結果が学内に公開されている。学内では、2018年に博士課程教育推進機構が新設され、卓越大学院事業をはじめとする各種大学院教育事業の総括部門として機能するとともに、新たな大学院共通科目「プロフェッショナル・リテラシー」を立ち上げたり、既存の体験型講義を教養教育院と合同で開講するようになったりなど、教養教育院と連携しての活動が続いている。

当初の大学院共通科目は、各研究科において随意科目として扱われていたが、教養教育院からの働きかけを繰り返した結果、修了単位に算入できるように各研究科で規程改正が進んできている<sup>1</sup>。また、当初から、学内のリーディング大学院事業や卓越大学院事業と連動し、履修によって受講生のポイントが加算される仕組みが導入されていたが、2021年度に開始された次世代研究者挑戦的研究プログラム（以下、SPRING事業）では、一部の大学院共通科目が必修科目として位置づけられている。2022年度より本格実施されたジョブ型インターンシップにおいては、大学院共通科目がその受け皿として機能している。

### 3. 実施状況

#### 3.1. 大学院共通科目としての開講科目数の推移

大学院共通科目として開講された科目数と受講登録人数の変遷を図1に示す。科目数は2018年以降ほぼ横ばいとなったが、受講人数はその後も上昇をみせている。2022年度秋学期に開始された授業アンケートでは、授業に意欲的・自発的に取り組めたか、授業をとおして知的な関心、学修の手がかり、もしくは達成感が得られたかといった各設問にたいし、肯定的評価がつねに95%以上という結果が得られている。担当教員らの主観ではあるが、各授業科目の受講人数が少ないために教員との接触が多く細やかな授業進行ができることや、異分野の学生との交流の機会となっていることなどが総合的に反映された結果ではないかと考えられる。

なお、2025年度の開講科目の一覧は、表1に示すとおりである。

<sup>1</sup> 2025年度現在、13研究科中11研究科において規程改正が完了している。なお、未改正の研究科のうちの1つでは、後述する科目「プロフェッショナルリテラシー」と完全に同一の内容を、研究科独自の科目として開講している。

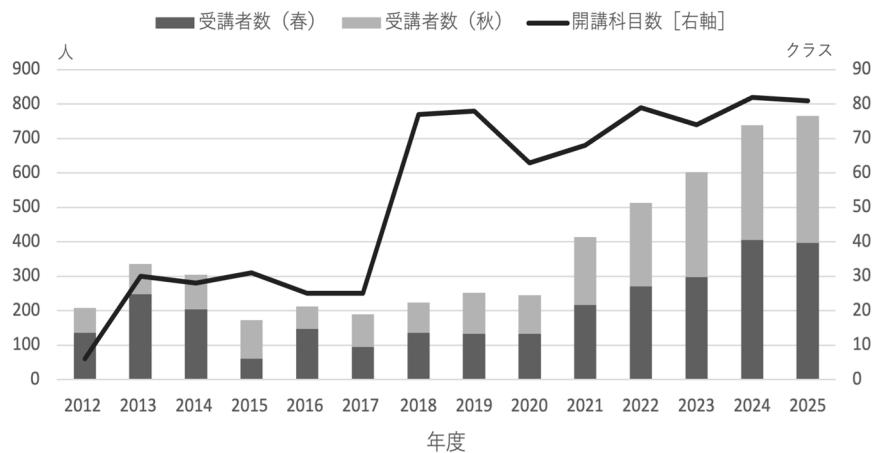


図1 大学院共通科目の開講科目数と受講登録人数<sup>注)</sup>の推移

出所：本学教養教育院事務室提供データより筆者作成

注：「プロフェッショナルリテラシー」を除く。(春)は春学期または前期、(秋)は秋学期または後期を示す。

表1 2025年度における大学院共通科目の開講数(科目名別)

| 春学期             |    | 秋学期             |    | 開講部局 |
|-----------------|----|-----------------|----|------|
| プロフェッショナルリテラシー* | 1  | プロフェッショナルリテラシー* | 1  | 博機   |
| 異分野コラボレーション演習   | 1  | 異分野コラボレーション演習   | 1  |      |
| ジョブ型研究インターンシップ  | 1  | ジョブ型研究インターンシップ  | 1  |      |
| リサーチスキルズ        | 8  | リサーチスキルズ        | 7  | 教養   |
| マルチリンガルスキルズ     | 28 | マルチリンガルスキルズ     | 22 |      |
| 体験型講義           | 2  | 体験型講義           | 0  |      |
| 大学教員準備講座**      | 2  | 大学教員準備講座*       | 2  | 他    |
| シンガポールインターンシップ  | 1  | シンガポールインターンシップ  | 1  |      |
| 実世界データ処理学特論     | 0  | 実世界データ処理学特論     | 1  |      |
| ヘルスマネジメント・スキルズ* | 0  | ヘルスマネジメント・スキルズ* | 1  |      |

出所：「2025年度名古屋大学大学院共通科目授業案内」(2025年4月版)より筆者作成

注：\*印は1単位科目、\*\*印は2単位科目と1単位科目の混合であることを示す。表中の「博機」は博士課程教育推進機構、「教養」は教養教育院を示す。

### 3.2. 特徴的取り組み

以下では、本学大学院共通科目のなかから特徴的な取り組みをいくつか紹介する。

### 体験型講義

大学院共通科目においては、リーディング大学院事業の共通部分を担い、事業終了後の内製化に備えるという趣旨のもと、「体験型講義」の導入が段階的に進められた。当初は2科目（「リーダーシップ」、「マネジメント」）から開始し、事業採択の増加と年次進行にあわせて、一時期には4科目まで拡充されている（「チーム・ビルディング」、「エンプロイアビリティ」を追加）。現在は、「エンプロイアビリティ」を毎年度、「マネジメント」と「ソーシャル・レスポンスビリティ」を隔年で開講している。

授業は前述のアクティブラーニング教室を使用して行われ、企業研修に着想を得た実践的な内容となっている（栗本・栗本、2016）。少人数で密度の濃い授業が実施できており、受講生にとっても担当教員にとっても満足度の高い授業である。一方で、学内への幅広い展開については、告知ならびに実施体制の双方において今後の課題といえる。

### 大学教員準備講座

初期から続く取り組みの1つに、高等教育研究センターが実施しているプレFDのプログラム「大学教員準備講座」がある。2010年度から続く大学院教育発達科学研究科の正課「大学教員準備講座」（2単位・春学期集中）が、大学院共通科目発足と同時に「大学教員論」の科目名で全研究科に開放された。大学院生のキャリア設計に資するものになるよう、多面的にアカデミックキャリアを検討する内容となっている（研究科科目設置にいたる経緯は夏目（2011）を参照）。教室は、前述のアクティブラーニング用教室として整備されたもののうちの一つをメインに使用している。

単位認定された受講者には、2023年度以降、高等教育研究センター長名の修了証が授与されている。卓越大学院やSPRING事業での履修ポイント化、教育系の単位取得が保健系の資格要件となっていることに伴い、近年の受講者数は安定して確保されている。

2023年度には、「大学教員論」（2単位・春集中）のほかに、「大学授業の設計と実践」（1単位・春学期集中、2024年度からは秋学期集中も開講）<sup>2</sup>、「大学授業の開発と改善」（1単位・秋学期集中）がいずれも大学院共通科目として新設され、各科目の修了証に加えて、3科目をすべて修了すると「大学教員準備講座修了証」が授与される仕組みとなった。「設計と実践」では授業設計と教授法を、「開発と改善」では自らの授業実践を改善する方法を、それぞれ学ぶことができる。

3科目ともに、グループワークや模擬授業／プレゼンテーションが豊富に織り込まれて

<sup>2</sup> 「大学教員準備講座」プログラム外では、2015年度から2020年度まで、同じく高等教育研究センター教員による「アクティブラーニングの技法」が隔年開講されており、本学GSI（graduate student instructor：授業を担当できる大学院生講師）制度の試行が始まって以降は、その認定時に受講が必要な科目となっていた。新しい「大学授業の設計と実践」は「アクティブラーニングの技法」に変わるGSI認定科目でもある。

おり、「多くの学びを得られた」といった高い評価が寄せられている。濃密なアクティブラーニング形式の授業であるがゆえに、今後もし受講者数が増えた場合には、適した教室の確保や、授業担当教員の確保などの困難への対応が課題になると予想される。

#### リサーチスキルズ：サマーキャンプ

大学院共通科目には、大学院共通外国語科目から移設された「リサーチスキルズ」や「マルチリンガルスキルズ」が含まれる。前者では、(i)すべての学問分野の学生が必要な学力を身につけ、さらに(ii)すべての専門職に対して汎用性のある学力を身につけてもらうことを目的に指導を行っている。そのなかで唯一、合宿形式の集中講義として開催されているのが「Research Skills: Summer Camp (リサーチスキルズ：サマーキャンプ)」である。

本科目は、課外セミナーだったものを 2015 年に単位化したもので、「develop your self-confidence in research, communication, leadership (研究、コミュニケーション、リーダーシップにおける自信を育む)」(告知ポスターより)を目的に、ワークショップ主体の授業を展開している。授業としての使用言語は英語である。9 月中の 3 泊 4 日または 4 泊 5 日の日程で近郊の青少年自然の家などに赴き、寝食を共にしながらの学びの機会を提供している。参加費用(宿代、食費など)として 1 日あたり 4 千円程度の学生自己負担がある。担当する教員は、開始当初は 1 名であったが、近年は 2～3 名のことが多い。2017 年度は合宿予定地での地震により開催見送り、2020 年度と 2022 年度はコロナ禍のため休止、2021 年度はオンライン開催としている。

実際の受講数は年度による変動もあるが概ね 20 名前後であり、うち 3 分の 2 程度が日本人学生である。例年、学会など学業に関わる事由による受講キャンセルが数名ある。2019 年度からは岐阜大学の学部生も受け入れており<sup>3</sup>、多いときは 4 割を占めたこともある。

学生たちは本科目を「これまでで最も充実した野外学習の機会」として一様に高く評価しており、学問分野や文化的背景の異なる仲間と協働することで視野が広がり、研究コミュニケーションに対する自信が高まったと強調している。一方で、担当教員は、学生の研究段階や英語運用能力の幅広さに対応したワークショップ設計に課題が残ることも認識している。今後は、国内外との大学間連携をさらに拡大し、より多様な学生が安心して参加できるプログラムへと発展させていく予定とのことである。担当教員としては、本科目が AI 時代の教育の未来に希望の灯をともし存在となることを目指しているという。

#### プロフェッショナル・リテラシー

2019 年度に開講された「プロフェッショナル・リテラシー」(1 単位・春/秋)は、本学

---

<sup>3</sup> 岐阜大学と名古屋大学が 2020 年 4 月に経営統合したのち、学部授業には連携開設科目が設置された一方で、大学院授業については岐阜大学における対応部局・体制の整備が待たれているところである。

博士課程教育推進機構が提供する科目で、日英の両言語でそれぞれ実施されており、8 件のセミナー受講と最終レポートでの合格により単位取得となる仕組みをもつ。シラバスには「学生は、自律、思考、提案、協働に関する技能が専門家としての人生にどのような意義を持っているかを学び、その技能を高めるための機会や訓練機会を把握し、長期的継続的な技能向上プログラムをみずから大学院の研究生活の中に組み込んでいく発想方法を身につけるきっかけにすることができます」と記されている（設計思想については、田中ほか（2020）を参照）。8 件のセミナーの内訳は表 2 のとおりである。

表 2 プロフェッショナル・リテラシーの授業内容

|               |                                                                     |
|---------------|---------------------------------------------------------------------|
| 1, イントロダクション  | 各研究科・専攻におけるオリエンテーション                                                |
| 2, 大学院生活を描く   | 大学院生としてのスタートをきるにあたり、自身の目標や獲得すべきスキルについて自覚する。                         |
| 3, 論文を構築する    | 研究論文執筆の準備として、論文目的に即し、書く必要のある情報を確認し、執筆プロセスや論文の構成を考えることができるようになる。     |
| 4, 説明力を磨く     | アクティビティを通じて 1 分間でわかりやすく、かつ興味深く自分の研究内容を他者に紹介できるようになる。                |
| 5, 公正研究のススメ   | 自分の研究観を見つめ直し、他者と共有することで、公正研究の意義と意味を考え、また、身の回りに起こりうる問題の予防と解決のヒントを得る。 |
| 6, 多様性で活力を上げる | 多様性の重要性を理解するため、ジェンダー（社会的性）を例に、性別によらず全ての人が活躍することによる社会の活性化の仕組みを知る。    |
| 7, 心身を整える     | 大学院生が学生生活を送るうえで有用な知識を獲得するとともに、ストレスや困難に対処できる力を身につける方法を体験し、今後の備えとする。  |
| 8, キャリアを設計する  | 自分のキャリアプランを考えるにあたっての要点を知り、大学院生活をどのように活用していけばいいかを理解する。               |

出所：博士課程教育推進機構ウェブサイトに掲載の 2025 年度シラバスより筆者作成

初年度は対面で開講され、各回何人の出席があるのかまったく予測がつかないという手探りでの実施であった。最終的に単位を取得したのは 50 名弱であった。翌 2020 年度には、新型コロナ禍により完全オンデマンドに切り替えられた。その後、受講しやすい環境の確保のために、曜日時限に縛られることのない完全オンデマンド方式を維持することになって、今に至る。2024 年度には単位取得者がはじめて 200 名を超えた。現在、SPRING 事業の受講生は、本科目が必修となっている。なお、開始当初は年度をまたいでの受講を認めていたが、受講実態にあわせ、2026 年度からは各学期内での受講完了を要件とすることになっている。

#### 4. 今後の課題

本稿では、名古屋大学大学院共通科目の設置経緯と特徴的な科目事例について概観してきた。本学の大学院共通科目は、種々の大学院事業の期間終了後の受け皿となるべく設置され、強いリーダーシップや明確な理念によって推進するというよりも、時代や状況にあわせた柔軟な対応を可能としてきたところに特徴がある。これを可能にしたのは、各研究科において大学院教育改革への理解が進むような時代背景であったように思われる。

最後に、大学院共通科目の課題について、いくつかの私見を述べて締めくくりたい。

まず、設置から一定の年数が経過しているため、科目内容ならびに運用体制の検証や見直しを、大学院共通科目全体について実施することが挙げられる。当初の設計意図と現状との整合性、また、社会的・時代的な新たな要請への対応について、検証をおこなってもよい時期であろう。なお、これまでの全体設計では、かなりの柔軟性をもたせ、さまざまな大学院教育改革の波に対応できるようになっていたことをふまえると、今後の基本方針をどのように設計するかが一つの焦点になると考えられる。

また、各研究科との意見交換を実施することを課題として提案したい。大学院共通科目の位置づけや活用方法についての共通理解を深め、研究科における状況についての知見を集約することは、今後の改善のために有益である。

こうした取り組み、さらに大学院共通科目の開設以降に発足した博士課程教育推進機構との各種調整を通じて、学内における大学院共通科目の位置づけを明確にし、より効果的な運用体制の構築を目指すことが、今後の課題であると認識している。

#### 註

本稿は、齋藤が草稿を作成し、山里が推敲を担当した。関係者からの聞き取りは、両名で行った。現在の科目は齋藤が、過去の科目は山里が、それぞれ中心となって整理した。担当箇所によらず、本稿については両名が等しく責任を負う。

#### 謝辞

本稿の執筆にあたり、設立当時の貴重な情報をご提供いただいた山本一良氏、栗本英和氏、山本美穂氏（以上、教養教育院の元関係者）、ならびに本学における会議資料やデータについてご助言いただいた井手暢子氏、嶽盛徳広氏（教育推進部全学教育推進課）に、御礼申し上げる。また、各開講科目について情報をご提供いただいた、担当教員の栗本英和氏（再掲）、頼偉寧氏、安部有紀子氏、田中瑛津子氏に感謝申し上げます。

#### 参考文献

中央教育審議会（2011）「グローバル化社会の大学院教育」（平成23年1月31日答申）。博士課程教育推進機構ウェブサイト「プロフェッショナル・リテラシー」。URL <https://de>

c.nagoya-u.ac.jp/wp/wp-content/uploads/2025/03/0d52f912d08fbbac9523e9cbc2ee79f7.pdf (最終閲覧 2025 年 11 月 15 日)

栗本英和・栗本昂輝 (2016) 「資質・能力を醸成する学修プログラムの開発—Active Learning による思考の多様化と深化—」『名古屋高等教育研究』第 16 号、pp. 5-22. URL <https://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/publications/journal/no16/01.pdf> (最終閲覧 2025 年 11 月 15 日)

名古屋大学教養教育院『2025 年度名古屋大学大学院共通科目授業案内』(2025 年 4 月版). 名古屋大学ライティングセンター公式サイト「過去のサマーキャンプ」. URL [https://www.ilas.nagoya-u.ac.jp/Meiwriting\\_AWU/ja/past-camps.html](https://www.ilas.nagoya-u.ac.jp/Meiwriting_AWU/ja/past-camps.html) (最終閲覧 2025 年 11 月 15 日)

夏目達也 (2011) 「大学教育の質保証方策としての FD の可能性」『名古屋高等教育研究』第 11 号、pp. 133-152. URL <https://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/publications/journal/no11/10.pdf> (最終閲覧 2025 年 11 月 15 日)

田中瑛津子・杉山直・齋藤芳子・森典華・松浦好治 (2020) 「PhD スキルフレームワークの作成と活用—名古屋大学院生の自律的スキル訓練支援—」『名古屋高等教育研究』第 20 号、pp. 393-411. URL <https://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/publications/journal/no20/20.pdf> (最終閲覧 2025 年 11 月 15 日)